

大学の海外同窓会における組織運営及び同窓生と大学との協働
に関する考察 一各大学・機関の中国同窓会の活動を参考に一

北京研究連絡センター

瀧瀬 由香理

1. はじめに

筆者は日本学術振興会の国際学術交流研修により、2014年4月に同北京研究連絡センターに着任した。北京に来て早々に気付いたことの一つに、様々な大学の同窓生コミュニティの存在が挙げられるが、北京だけでも実に23の日本の大学¹の同窓会が存在している。

大学において同窓生は重要な位置づけにある。日本の場合、少子化が進み、国立大学では毎年国からの予算配分額が削減されている状況の中で、大学運営にとって同窓生からの寄付は非常に重要な意味をもつ。また、在学生の学生生活や就職活動に対する同窓生からの支援は学生に大いに助けとなり、各界での同窓生の活躍は大学のイメージ向上にもつながっている。特に大学のイメージは進路選択に大きな影響を与えといわれ、ポジティブなイメージの大学に志望者が集まる傾向にある²。このように同窓生は、大学にとって非常に重要なステークホルダーなのである。

さらに、近年は国際間の大学間競争が激しくなり、大学を取り巻く国際化の様相も著しい動きをみせている。文科省でも、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」、「グローバル人材育成推進事業」、「スーパーグローバル大学創成支援事業」等の施策により、各大学の国際化を推進してきている。特に、最も新しいスーパーグローバル大学創成支援事業においては、「外国人留学生OBの積極的活用」を促進している。これも、大学が国際化を推進し、海外から優秀な留学生を獲得するために、また、教育・研究の国際競争力を上げていくために、海外同窓生と大学とのネットワーク強化が欠かせなくなっていることを示すものである。文科省が2013年にまとめた外国人留学生の受入れ戦略報告書³の中でも、帰国した外国人留学生のフォローアップを行い、彼らとのネットワーク形成を行うことが、戦略を実現するための方策の一つとして述べられている。

このような海外同窓生を重視する動きは、欧米の先進諸国においてはかなり以前から認識されており、そのためのフォローアップも盛んに行われてきた。その一環として海外同窓生のネットワークも世界各地に広範に組織されている⁴。一方、日本の大学同窓会の活動に関しては調査や報告も極めて限られており、状況は十分に把握できていないのが現状である。

このような背景から、日本の大学の海外同窓生ネットワーク、特に中国における同窓会組織の運営及び同窓生のフォローアップ活動に関する現状を把握し、将来方向を考察することを目的に本調査を実施することとした。

2. 日本留学経験者ネットワークの現状と本報告書のねらい

現在、日本への留学経験者の同窓生ネットワークはどのようになっているであろうか。外務省が2012年に在外公館を通して実施した調査の統計によると、全世界で120か国、359の日本留

¹ 北京日本人会登録数

² 本間『大学マネジメント』（2014年11月号）

³ 文部科学省「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）」

⁴ 文部科学省「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究—主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み—」報告書

学経験者の帰国留学生会⁵が組織されているとのことである。組織数を地域別に分けてみると、下の図1のようになる。特にアジア地域において帰国留学生会の組織が多いことがわかる。

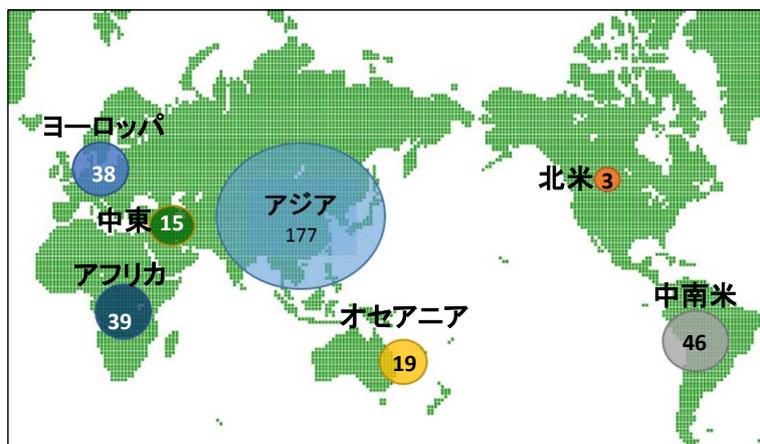


図1. 全世界地域別帰国留学生会組織数⁶

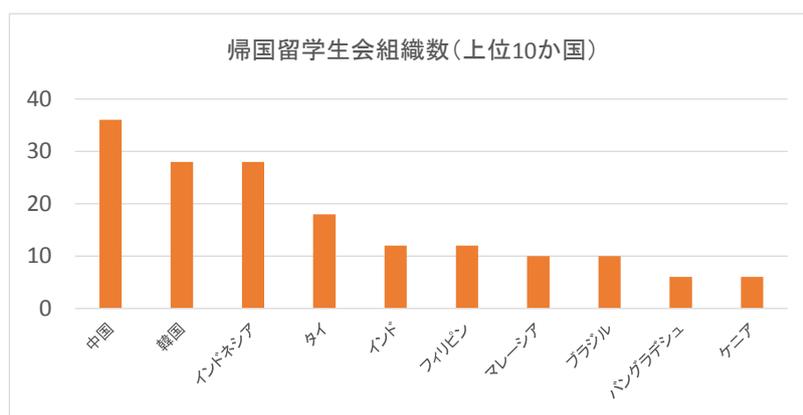


図2. 帰国留学生会組織数（上位10か国）⁶

また、図2は帰国留学生会組織数を国別で見たときに、上位10か国を順に並べたものである。図からもわかるように中国が最も多く、次いで韓国とインドネシアが同数で続いている。中国が最も組織数が多いことは、中国からの留学者数が日本の留学者数の出身国別割合で6割以上を占めていることを考えれば当然とも思えるが、一方で、留学者数が圧倒的に多い割には、組織数はそこまで多いとはいえない。この点からみても、日本の中国における同窓生ネットワークの展開はまだまだ発展段階であり、開拓していく余地があるといえよう。

これを大学の同窓生ネットワークに視点を絞った場合、ネットワークの展開には2つの段階が考えられる。まず、現在はまだ海外での同窓生ネットワークが組織化も含めて整備されていない大学が、新たに海外に同窓会組織を立ち上げるという段階が考えられる。また、次に、既に同窓会組織をいくつかの国にもっている大学が、新たに別の地域において同窓会組織を立ち上げると

⁵ 「帰国留学生会」の種類には、大学の元留学生の同窓会組織から、元文科省国費留学者による同窓会組織、JICA 事業経験者による組織等多岐にわたる。特に、図1で中南米やアフリカの帰国留学生会総数が多くみられるが、多くは国別の留日経験者の会もしくは JICA 事業等により支援を受けた新興国の留日経験者組織であり、大学個別の同窓会組織は非常に少ない。

⁶ HP 非公開希望の団体を除いた数値（出典：外務省 HP「帰国留学生会リスト」）

いう段階が考えられる。前者のような大学においては、おそらく留学生数の最も多い中国におけるネットワークづくりから始めていく場合が多いのではないかと考える。後者のような大学においては、さらなる世界各地の海外同窓生とのネットワーク強化を推進していくために、既存の同窓生ネットワークである海外同窓会の運営方法や活動内容を検証しながら、新たな海外同窓生のネットワークづくりの方策を検討していくものとする。

このように、段階別に同窓会ネットワークを展開する大学があることを想定し、今回、留学生同窓生数及び帰国留学生会組織数の最も多い中国における各大学・機関の同窓会組織に焦点を当て、各組織の状況について調査をすることとした。調査は、各同窓会組織の運営体制、活動内容、課題点及び大学との協働事例を具体的に把握する必要があることから、各組織の関係者への聞き取りによる方法で実施した。調査で得られた各組織の事例から、中国での同窓会運営及び大学との協働における課題を探りながら、一方で良好事例を抽出し、これを共有することで、各大学におけるより効果的な同窓生ネットワークづくりに寄与することが本報告書のねらいである。

そのため、本報告書では、まず 3 章、4 章で日本の各大学の同窓会組織及び大学以外の中国人留日経験者による同窓会組織について、関係者への聞き取りやホームページ等で公開されている情報に基づき、各組織の概要や活動内容を紹介し、5 章で、大学との協働の観点から、同窓生個人からみた大学や同窓会への意見を収集した結果を述べる。6 章では、調査を行った各同窓会組織の運営体制及び活動の課題を整理した上で、課題を解決するための方策及び同窓生のフォローアップに有効と思われる方策をまとめ、今後の大学と同窓生との協働に関する考察結果を述べる。

3. 各大学の中国同窓会の事例調査

今回、希平会⁷参加大学のうち、大学公認の中国同窓会をもつ 5 校（筑波大学、東京大学、一橋大学、名古屋大学、早稲田大学）の中国拠点事務所の担当者から協力を得て、聞き取り調査を実施した。なお、同窓会母体（例えば後述の「如水会」や「稲門会」本部）の運営や活動については、関連する内容を一部取り上げることはあるが、本稿での言及はできるだけ避けることとする。

3-1. 筑波大学の同窓会組織⁸

筑波大学の中国同窓会組織としては、筑波大学の中国人元同窓生により構成される「筑波大学中国校友会」、中国在住の日本人同窓生で多数を構成する「北京茗溪会」及び「華東茗溪会」がある。ここでは、主に「筑波大学中国校友会」について取り上げる。

⁷ 希平会（日中高等教育交流連絡会）とは、中国に事務所、拠点、同窓会組織等を持つ日本の大学、研究所、政府系機関等を中心に組織された団体のことで、隔月で集まり、日中間の教育・研究に関する情報交換や講師を招いての講演会等を行っている。JSPS 北京研究連絡センターが事務局を担当している。

⁸ 筑波大学上海教育研究センター王太芳職員への聞き取り調査に基づく。（2014 年 11 月 4 日、2015 年 1 月 24 日）

筑波大学中国校友会概要

【設立年月】2009年10月 【会員数】300名（2014年12月現在）

【役員構成】地区別校友会代表1名（計3名）

筑波大学中国校友会は、2009年の筑波大学中国事務所の開設と同時に大学主導で立ち上がった。大学から各地区に校友会代表として1名ずつ委任している。現在は校友会員を増やしていく段階にあるため、校友会員から会費は徴収していない。また、大学からの経費補助もない。

活動内容

現在定期的な活動は行っていないが、これまでに3回大型行事を開催している。2009年10月に筑波大学北京事務所の設立記念式典とあわせて校友会の設立大会を開催した。同式典には学長をはじめ、大学からの関係者が多数出席したほか、北京茗溪会の会員も参加し、参加者は総勢150名を超えた。2011年10月には、北京市の中国地質大学において「筑波大学中国同窓会フォーラム」を開催した。同フォーラムにも北京茗溪会員がパネリストとして参加をしている。また、2012年12月に上海教育研究センターを設立した時にも、設立記念式典に校友会員が出席している。このほか、大学の主催イベントを中国で開催する際には中国事務所の職員が校友会員に向けてメールで情報を知らせている。活動の特徴としては、前述のように北京茗溪会と共に活動を行っていることであるが、一方で、校友会独自の組織的な活動は少ないことが課題として認識されている。

同窓生との個別のネットワーク

校友会としての活動ではないものの、同窓生から個別に大学の活動に協力を得ている事例を以下に紹介する。

・SENDプログラム⁹により中国留学中の在學生への協力

筑波大学を修了した後、現在蘇州で道場を運営している中国人同窓生の協力を得て、同プログラムにより華東師範大学に留学をした体育研究科の學生が、同道場の生徒に剣道指導を行っている。（→5章にて詳細を紹介）

・留学説明会の周知

留学説明会を大学等において開催する際に、開催の大学等に所属する校友会員がいる場合は、校友会員から學生への広報に協力を得ている。

◎同窓生へのフォローアップ

筑波大学では2012年度に、海外で同窓会ネットワークに関連し尽力した人に対し、「アソシエイト」の称号を付与し、「アソシエイトカード」を送付した。同カードには、来日時の附属図書館の利用（入館のみ）や学内駐車場の無料利用が可能といった特典がある。この時、中国校友会員34名に同カードが送付されている¹⁰。

⁹ 「グローバル人材育成推進事業」の一環として行う取組のことで、日本人學生が留学先の現地の言語や文化を学習するとともに、現地の学校等での日本語指導支援や日本文化の紹介活動を通じて、學生自身の異文化理解を促すことを海外留学の目的の一つとして位置づけ、将来日本と留学先の国との架け橋となるエキスパート人材の育成を目指すプログラム。SENDは「Student Exchange Nippon Discovery」の略。

¹⁰ 筑波大学連携・渉外室福居専門職員への聞き取り調査に基づく。（2014年9月25日）

3-2. 東京大学の同窓会組織¹¹

東京大学の同窓会組織として、東京大学北京校友会と上海日中银杏会が、2004年の東京大学北京代表所の立ち上げとともに設立されている。本節では前者の東京大学北京校友会について取り上げる。

東京大学北京校友会概要

【設立年】2004年 【会員数】707名（2015年1月現在のメーリングリスト登録者数、日本人同窓生・中国人同窓生混合（中国人同窓生がやや多い））

【役員構成】会長、副会長、事務局長、事務局員7名

事務局長を含む事務局会議が年3～4回あり、校友会の企画を検討、実施している。東京大学北京代表所職員は、北京校友会の事務局員として校友会と協力して、新規会員の募集、会の開催連絡、会員名簿の整理を行っている。大学からの経費補助はなく、校友会行事は当日徴収する参加費により運営されている。同窓生のみならず、北京に留学中の在學生も参加をしている。

活動内容

東京大学北京校友会の定期的な活動として、毎月懇親会を開催している。また、近年は通常の懇親会のほか、東京大学の教授による講演会や、校友会員による年に2～3回のミニ講演を開催している。例えば、過去に開催された講演会、ミニ講演では、教授による日中関係をテーマにした講演、日本人同窓生による「日本企業の求める人材」をテーマにした講演、留学中の学生による自身の研究をテーマにした講演が行われた。

このような定期的な会合のほか、大学の総長や副学長が訪中した際には、同会で総長、副学長による講演会を開催している。また、「体験活動プログラム」やキャンパスツアー等で学生が中国に来た時にも、学生を交えた会を開催するなどしている。

また、東日本大震災で被災した東大生のための基金として、同会から数十万円の寄付があった。

◎校友会員による東大「体験活動プログラム」への協力

東京大学では、2012年から「体験活動プログラム」という、次世代を担う学生を育成するという教育目標を達成していく方策の一つとして、希望する学部学生に対し、国内外を問わず実社会での多様な体験を得るための短期プログラムを実施している¹²。過去に北京で実施された同プログラムの運営は、東大北京代表所と東大北京校友会とが連携して行われている。例えば、同プログラムにより2014年には14名の学生が北京に來訪したが、その体験活動の一つとして、学生が中国企業や日系企業を訪問し、各企業の同窓生との交流を行うという取組が行われた。この取組は、校友会員の全面的な協力によるものである。

¹¹ 東京大学北京代表所宮内所長への聞き取り調査に基づく。（2015年1月27日）

¹² 東京大学 HP, 特徴的な教育活動 (http://www.u-tokyo.ac.jp/stu01/h19_j.html) (2015年1月27日アクセス)

3-3. 一橋大学の同窓会組織¹³

一橋大学の同窓会組織としては、現在中国に4つの組織（如水会北京支部、北京如水会留学生会、如水会上海支部、如水会広州支部）がある。北京の如水会組織としては日本人同窓生による如水会北京支部及び中国人同窓生による北京如水会留学生会があり、定期会合を合同で開催するなど、合同で活動しているため、本節では両組織について取り上げることとする。

如水会北京支部概要

【設立年】1980年 【会員数】50～60名（日本人同窓生のみ）

【幹事構成】支部長1名、幹事2名

北京如水会留学生会概要

【設立年】2006年 【会員数】200名（中国人同窓生のみ）

【幹事構成】会長1名、副会長1名、秘書長1名



『如水会会報』

活動内容

両組織が合同で行う定期的な活動として、2か月に1度の頻度で、学習会及び懇親会を開催している。会の企画は支部長と幹事が行い、一橋大学中国交流センターが会員へメールで連絡をしている。一橋大学中国交流センターは同窓会の事務局を務めており、会の開催時には必ず参加するほか、会員名簿を管理している。また、商東戦（東京大学校友会との対抗戦）、三商大戦（大阪大学、神戸大学との対抗戦）という、他大学の同窓会とのゴルフコンペを春・秋2回ずつ開催している。

このほか、如水会員には毎月如水会本部から『如水会会報』が送付されており、頻繁に大学の最新情報や在学生の活動情報、地区別、ゼミ別、サークル別等、世界中の様々な如水会支部会の活動情報を得ることができる。支部長と幹事には本部からのメールマガジンも毎週届く。

毎回、学習会を実施することは如水会北京支部の特徴であるが、如水会内の国内外の支部では常に様々な形で講座、勉強会が開かれているようである¹⁴。これは、一橋大学の同窓生に同業種が多い（北京の場合、金融、商社、海運が多いとのこと）ため、最新動向を情報共有する意味でも大いに会が活かされているものと考えられる。

また、上記の定期的な活動のほかに、学生の海外研修時や、またシンポジウム等で教員が訪中した時などに会員が集まる会を年に5、6回開催している。特に、海外研修で中国に来る学生にとっては、中国市場の一線で働く同窓生の講演が良い刺激になっているという。

このように如水会全体で各支部の活動が活発であり、学生にとって如水会の同窓生がロールモデルを示すことで喜ばれているなどにより一橋大学は卒業生の満足度調査で全国3位の満足度を得ている¹⁵。

¹³ 一橋大学中国交流センター志波代表への聞き取り調査に基づく。（2015年1月29日）

¹⁴ 酒井『大学マネジメント』（2014年11月号）

¹⁵ 日経キャリアNET「ビジネスパーソンが卒業した大学満足度調査」（日経HR・日本経済新聞社実施）

3-4. 名古屋大学の同窓会組織¹⁶

名古屋大学の同窓会組織としては、中国内に名古屋大学上海同窓会及び名古屋大学北京同窓会がある。ここでは、名古屋大学中国交流センターが事務局を務める上海同窓会を取り上げる。

名古屋大学上海同窓会概要

【設立年】2005年 【会員数】121名（2014年12月現在、

日本人同窓生・中国人同窓生混合）

【役員構成】会長、幹事長、幹事5名

上海同窓会の同窓会旗



名古屋大学上海事務所（当時）開設の同年に大学公認の同窓会組織として立ち上がった。名大の事務所が事務局として会員名簿を管理、会員への連絡を行っている。同窓会の専用HPがあり、入会希望者は登録票をHPからダウンロードし、事務局に提出することで会員として登録され、希望者には「会員認定証」が送付されている。また、了承を得た会員については、同HP上に氏名・所属を公開している。大学の経費補助はなく、同窓会の行事は参加費により運営されている。

活動内容

名古屋大学上海同窓会の定期的な活動として、毎年1月に新年会を開催し、夏に親睦旅行を実施している。その他不定期な活動としては、これまでに、上海名古屋大学同窓会5周年記念行事や、総長等の役員が訪中した際に同窓会総会を開催している。また、過去には上海同窓会から名古屋大学の基金に百数十万円の寄付が行われている。

◎同窓会員による学生支援の取り組み

名古屋大学上海同窓会では、中国に留学中あるいは短期語学研修で訪中した在学生の活動を積極的に支援している。これまでに実施した同窓会員からの支援は以下の通り。

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| ・インターンシップ支援（キャンパスアジアにより留学中の学生） | 2013年から実施 |
| ・会社見学の受け入れ（中国語研修の学生、研修期間中に半日） | 2011年から実施 |
| ・家庭訪問の受け入れ（中国語研修の学生、研修期間中に半日） | 2011年から実施 |
| ・ホームステイの受け入れ（キャンパスアジアにより留学中の学生） | 2015年実施予定 |

言及すべきは、上記支援に協力をした会員はほぼ中国人の同窓会員であるという点である。特に上海同窓会会長は自身で会社を営んでいることもあり、開始以降インターンシップや会社見学の受入に毎年協力するなど非常に積極的である。これらインターンシップはじめ会社訪問や家庭訪問の受け入れは、まず事務局から会員に対し、受入協力の依頼と可否の問い合わせを行っている。その後、承諾を得られた同窓生と事務局とで調整し、最終的に受入先を決定している。

◎同窓生へのフォローアップ

名古屋大学では、上海同窓会も含め海外の同窓会及び同窓会員に対し、次のような特色あるフォローアップを行っている。

¹⁶ 名古屋大学中国交流センター劉蕾副センター長への聞き取り調査に基づく。（2015年1月19日）

- ・同窓会会長を毎年名古屋大学で開催するホームカミングデーに招待し、その旅費は大学側で負担している。(会長が出席辞退の場合は、他の会員が代理で出席)
- ・同窓会活動に積極的に関与した、あるいは学生支援に貢献した同窓会員に対し、各同窓会から毎年 1 名推薦をし、選ばれた者は大学から「国際交流貢献顕彰」で表彰される。上海同窓会からは過去に 2 名表彰されている。

3-5. 早稲田大学の同窓会組織¹⁷

早稲田大学の同窓会組織としては、現在中国に 5 地区（北京、上海、大連、華南、香港）の「稲門会」がある。国立大学では大学主導で同窓会を設立する動きが多い中で、これらの稲門会は同窓生自ら集まり組織され、大学から「稲門会」としての認可を得て現在までに至る。会の自律性を尊重しているため、他の大学では拠点事務所がしばしば同窓会の事務局を務めることもあるが、早稲田大学の拠点事務所が稲門会の事務局を務めるという事は行っていない。稲門会の活動はそれぞれの幹事団が企画、通知、運営を行っている。本節では、早稲田大学北京教育研究センターの向所長が一会員として参加している「北京稲門会」を主に取り上げる。

北京稲門会概要

【設立年】1980 年代

【会員数】約 600 名（メーリングリスト登録者数）（日本人同窓生・中国人同窓生混合）

【役員構成】会長、副会長（2 名以上）、幹事長、副幹事長

活動内容

会員同士の交流・親睦を深める機会として、懇親会とゴルフコンペを毎月定例で実施している。また、慶應大学の同窓会組織である「三田会」と合同でのイベントも定期的開催している。（合同新年会、ゴルフコンペ早慶戦、合同暑気払い等）なお、これらの行事は当日の参加費により運営されている。このように年間の開催する交流行事の数が多く、また慶應大学との一定の関係性が、卒業後に海外でも続いている点は稲門会の特徴といえよう。600 人ほどいる会員の中で日本人会員が約 400 人で、北京から帰国後に、北京稲門会東京総部でも交流を続けている。

なお、早稲田大学浙江省出身の中国人校友を中心に、浙江稲門会の立ち上げを準備しており、そして、北京・上海の中国人校友を中心に、2015 年度中には「全中国校友会」を組織することが検討されている。これは中国に既にある稲門会組織と並行して、在学生支援やボランティア活動や地域間交流などを展開していき、今後さらに早稲田大学と中国人同窓生とのネットワークの更なる強化が図られることが期待される。

¹⁷ 早稲田大学北京教育研究センター向所長への聞き取り調査に基づく。（2015 年 1 月 27 日）

4. その他各中国同窓会の事例

本章では、大学個別のものでない同窓会として、筆者が現在所属する独立行政法人日本学術振興会（以下、JSPS）中国同窓会のほか、卒業・修了した大学の枠を超えて活動をしている中国人留日経験者の同窓会組織について紹介する。

4-1. 日本学術振興会（JSPS）の同窓会組織

JSPS 中国同窓会概要

【設立年】2010年【会員数】1,259名（2015年1月現在）

【役員構成】会長1名、副会長3名、支部長（35支部）（任期：2年）



同会は会員間の相互交流と友好、日中の相互理解と友好関係の促進を目的として、JSPS同窓会¹⁸の中では13番目に設立され、また、最も会員数の多い組織である。JSPS北京研究連絡センターが同窓会事務局を務めている。会員情報はデータベース化し、事務局で管理をしている（HP上にも掲載しており、会員は閲覧可能）。JSPSの事業を終了し帰国すると自動的にJSPS中国同窓会会員として登録される。また、会員登録票が事務局に提出された際にも随時会員名簿を更新している。2015年1月現在、中国同窓会員からの会費の徴収は実施しておらず、同窓会の運営経費（イベント時の会場使用料、役員旅費、懇親会費等）の経費の多くをJSPSで負担している。

活動内容

定期的に行っている主な同窓会活動は以下の通りである。

- ・理事会の開催（年1回）
- ・総会の開催（年1回）
- ・支部会の開催（年2~3支部）
- ・会長会議の開催（年1回）
- ・JSPS 外国人研究者再招へい事業の募集及び選考委員会の開催
- ・シンポジウム・学術セミナーの開催
- ・ニューズレター「学思」への会員インタビュー記事の掲載、会員への冊子の送付
- ・毎月 JSPS の活動情報等を会員へメールで配信
- ・同窓会 HP の随時更新



2014年同窓会総会

また、不定期に行う活動としては、JSPS タイ同窓会との交流（2012年、2013年）や JSPS 事業説明会開催時における支部会の協力がある。

◎JSPS 外国人研究者再招へい事業（Bridge Fellowship Program）による研究交流

上記活動内容で紹介したもののうち、中国同窓会会員間の交流のほか、中国同窓会として日中間の研究交流を促進している活動事例を紹介する。

JSPSの外国人研究者再招へい事業は、以前にJSPSの外国人特別研究員事業や招へい研究者事

¹⁸ JSPS の事業に採択され、日本での研究活動を終了した外国人研究者により構成される。2015年1月現在、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、スウェーデン、インド、エジプト、ケニア、韓国、バングラデシュ、フィンランド、タイ、中国、フィリピンの14か国で組織されている。

業、論博事業等に採択され、日本において研究活動を行ったことのあるJSPS同窓会員¹⁹に対し、短期間（14日～45日間）再度日本に滞在して共同研究や講演会の開催等の研究活動を行ってもらい、従前の学術ネットワークをさらに強めるとともに、新たな学術ネットワークを築いてもらい、両国間の懸け橋（Bridge）として学術・研究交流をさらに促進することを目的とした事業である。JSPS中国同窓会では本事業を利用して毎年5名前後の同窓会員が日本で研究活動を行っている。渡航費や滞在期間中の旅費はJSPSで負担しており、帰国後も再度日本での研究活動を希望する会員にとって本事業は役立っている。

◎同窓会主催シンポジウム、学術セミナーの開催による研究交流

JSPS中国同窓会では表1のように、総会にあわせてシンポジウムを開催してきたほか、JSPSと対応機関との共催で行う大型シンポジウムにおいても同窓会員からの提案を受け付け、実際これまでも同窓会長や支部長が中心となり企画をしている。また、支部会活動にも力を入れており、2014年度からは支部会でも日本から講演者を1名招へいし（講演者旅費をJSPSが負担）、学術セミナーを支部会とあわせて開催できるようにしており、日中の学術交流に寄与している。

| 開催時期 | 開催地 | シンポジウム／セミナー（内容） | 日本からの講演者 | 参加者数 |
|-----------|-----|---------------------|----------|------|
| 2011年12月 | 湖北省 | 学術シンポジウム（区域発展と先端技術） | 2名 | 80名 |
| 2013年12月 | 広州市 | 学術シンポジウム（環境分野） | 1名 | 40名 |
| 2014年8月 | 安徽省 | 学術セミナー（情報科学分野） | 1名 | 40名 |
| 2014年10月 | 重慶市 | 学術セミナー（生命科学分野） | 1名 | 60名 |
| 2014年11月 | 天津市 | 学術シンポジウム（薬学分野） | 2名 | 70名 |
| 2014年12月 | 浙江省 | 大型学術シンポジウム（生命科学分野） | 7名 | 80名 |
| 2015年3月予定 | 上海市 | 学術セミナー（医学分野） | 1名 | — |

表1. JSPS中国同窓会員が企画し開催した（予定を含む）学術シンポジウム及び学術セミナー

その他、JSPS中国同窓会員が、JSPS北京研究連絡センターが開催するJSPS事業説明会に無償で協力し、日本における研究活動・研究環境の紹介や事業申請における助言等、説明会参加者に向けて自身の日本滞在の経験談を話してもらうなどの協力を得ている。

4-2. 欧美同学会・中国留学人員聯誼会留日分会²⁰

「欧美同学会・中国留学人員聯誼会」（以下、欧美同学会）は、中国政府公認（中国共産党が管轄）の全国的な元留学生組織である。もともとはヨーロッパとアメリカで学んだ留学帰国者の同窓会組織として1913年に創立し、留日分会は1999年に支部として設立された。2015年1月現在、傘下に15の地区別支部がある。

¹⁹ JSPS同窓会に所属するJSPS事業経験者

²⁰ 「帰国留学生要覧」（平成25年度8月時点）より

欧美同学会留日分会概要

【設立年】1999年 【会員数】約700名

【役員構成】会長1名、副会長8名、秘書長、副秘書長6名

活動内容

- ・中国留学生日本留学110周年記念会の開催、記念文集の発行
- ・テレビ局と共同で、日本留学の特集番組を制作
- ・中国留日同学会代表団が日本を訪問し、関係団体等と交流
- ・北京日本人会と地方都市への視察や植林活動を実施
- ・秋の遠足会の開催
- ・『留日分会工作簡訊』（ニューズレター）の定期発行
- ・欧美同学会主催行事への参加、各分会との交流



2014年総会の様子

上記の他、次節で紹介する留日学人活動ステーションと合同で年次総会を開催するなどしている。

4-3. 留日学人活動ステーション²¹

同組織は日本に留学または研修経験のある中国人自ら創立した中国初の在日留学帰国学者による親睦団体である。全国青年連合会・中日青年交流センターに所属し、中日青年交流センターの行政的な指導を受けている。

留日学人活動ステーション概要

【設立年】1992年 【会員数】約1,800名

【役員構成】主任、常務副主任2名、副主任3名、常務理事12名

中国の全国的な元日本留学生会としては最大の規模である。主任（会長にあたる）は現海南大学学長（東京大学同窓生）が務め、年に4～5回行う役員会で会の企画を行い、役員が主要な事業を分担して業務を行っている。活動費用の一部を日本大使館が負担している。大学や研究所に所属する者が多いことがその特徴であり、会員の高い専門性を活かした中日科技文化交流会をはじめとする学術交流活動を多数実施している。

活動内容

- ・日本留学帰国者の名簿の編集・出版
- ・総会、学術シンポジウム、懇談会、春の遠足等を開催
- ・日本留学希望者への支援
- ・日中学术交流促進センター(北京)の運営、科学技術専門図書等による日本情報の提供
- ・日中両国の重大な友好交流会議又は式典等への参加
- ・日中両国の民間の科学技術、教育、経済情報及び友好交流の促進



中日科技文化交流会の様子

²¹ 2010年JSPS中国同窓会設立大会における講演資料及び「帰国留学生要覧」（平成25年度8月時点）より

5. 留日経験者（同窓生）の声

本章では、大学修了後に帰国した現在も日中の文化・学術交流を活発に行っており、大学や日本大使館等と連携して活動を行っている2名の中国人留日経験者にインタビューをし、同窓生個人の立場からみる同窓会活動及び大学のフォローアップについてお話を伺った。

5-1. 楊敢峰先生（筑波大学同窓生）

筑波大学の同窓生として大学の活動にも協力している楊氏から、大学とのこれまでの関係と同窓生として大学に期待することなどの意見を伺った。

【楊 敢峰 氏プロフィール】

- ・2005年 筑波大学体育研究科コーチ学専攻（修士）修了
 - ・2006年 江蘇省蘇州市において、楊派武館を創立
- 筑波大学留学前は、蘇州大学で講師として中国武術を指導していた経験を持つ。剣道を学ぶために筑波大学に留学し、計5年間在籍した。現在は道場（楊派武館）を運営しながら、剣道をはじめ太極拳、中国武術の指導をしているほか、剣道世界大会の中国代表選手としても活躍している。



楊先生の道場（楊派武館）にて

大学修了後の筑波大学との関係

大学を修了し帰国した後は、在学時の指導教官であった香田教授（体育系）を年に1度中国に招へいし、自身の道場で剣道講習会を開催したり、蘇州で開催している剣道大会に出席したりしている。そのような継続した関係もあり、筑波大学で剣道による SEND プログラムの計画が上がった際に、大学側から楊先生に協力の依頼があった。同プログラムにより、開始から3年間毎年剣道が専門の学生が上海に留学しており、その学生は毎週末、楊先生の運営する道場で剣道の指導をしている。同プログラムへの協力により大学から「アソシエイト」の称号が付与されている。

同窓生として今後筑波大学に期待すること

- ・筑波大学中国校友会の存在は知らなかったが、友人を除く校友の集まりはないので、筑波大学としての同窓会が頻繁に開催されるようになるとうい。
- ・大学のHPには特に同窓会の情報が少ないと思う。HPでなくても、メールやSNS（微信（WeChat）等）で卒業生の活動情報を提供、交換することができればよいと思う。
- ・過去に在學生や帰国留學者の就職支援を行ったことはないが、協力の依頼があれば同窓生として喜んで協力したい。大学側で就職支援の枠組みをつくってもらえると、協力しやすい。

5-2. 李賛東先生（岐阜大学同窓生、九州大学同窓生、JSPS 同窓会員、留日学人活動ステーション常務副主任）

【李賛東教授プロフィール】

- ・ 1985 年 岐阜大学農学部修士課程修了
- ・ 1988 年 九州大学農学部博士課程修了
- ・ 2001 年～ 中国農業大学生物学院 教授
- ・ 2000 年 JSPS 外国人招へい研究者（長期）に採択
- ・ 2002 年 JSPS 外国人招へい研究者（短期）に採択
- ・ 2014 年 JSPS 外国人研究者再招へい事業に採択



李賛東教授

JSPS 事業に度々採択され、研究者として活躍するのみならず、社会活動も非常に活発に行っている。その一つとして、「日本留学アドバイザー」を 22 年間務めており、大使館で留学相談を行うほか、希平会主催留学説明会等でも日本留学全般の講演を行っている。また、留日学人活動ステーションの常務副主任を長年務めており、組織の中心者として多々の学術交流行事の企画・準備から、当日の司会や通訳まで行っている。訪日の際には度々教育・研究関係機関や日中交流協会をはじめとする中国にゆかりのある機関、県庁等の自治体等、日本全国各地をまわるなど、精力的に日本とのネットワークを構築し、日中交流の最前線で活躍をされている。

帰国後の日本の大学との関係

指導教官が定年退職したため、母校との研究交流や母校への訪問は以前に比べて減ったものの、帰国後九州大学の同窓会組織では役員を務め、総会等の行事に出席をしている他、年に数回届くメールマガジンにより九州大学の中国における活動の情報を得ている。なお、岐阜大学は中国人同窓生の数が少なく北京に同窓会組織はないものの、個別に大学関係者や同窓生とは連絡をとりあっているとのことである。また、李教授は自身が修了した大学のみならず、全国的に研究ネットワークを広げ、昨年は JSPS 事業により東京農業大学での研究活動の一環として学生に向けて研究講演会を行っている。

同窓生として今後大学に期待すること

- ・ 年に数回でもよいので、メールで大学の最新情報（新たに建物やプロジェクトができた等）が届くようになるとよい。自分でもたまには母校の情報を見に行くことはあるが、メールが届けば、クリックするのみで容易に最新情報が得られるようになるため。
- ・ 留日経験のある中国人研究者が、継続して日本の大学や研究機関と研究交流をしやすくなるとよい。

6. 同窓会運営の課題と有効な方策案の検討

6-1. 本調査のまとめと課題の整理

本節では、日本の各大学等の中国における同窓生組織について、本報告書で事例調査を行った6機関の同窓生組織の運営体制を次の表2にまとめる。

| 同窓会組織 | 会員構成 | 人数 | 役員体制 | 経費補助 | 大学事務所の名簿管理 | 連絡手段 | 定期会合 | 主な活動 |
|------------------------|----------|----------------|------------|----------|------------|---------|----------|----------------------------|
| 筑波大学中国校友会 | 中 | 300 | 地区代表各1名 | 無 | 有 | メール | 無 | 大学との大型行事開催 |
| 東京大学北京校友会 | 中・日 | 707 | 10名 | 無 | 有 | メール | 有 | 懇親会、講演会、ゴルフコンペ |
| ①如水会北京支部 ②北京如水会留学生会 | ①日 ②中 | ①50~60 ②200 | ①3名 ②3名 | ①無 ②無 | 有 | メール | ①有 ②有 | 学習会・懇親会、ゴルフコンペ |
| 名古屋大学上海同窓会 | 中・日 | 121 | 7名 | 無 | 有 | メール・SNS | 有 | 新年会、夏季旅行 |
| 北京稲門会 | 中・日 | 約600 | 10~20名 | 無 | 無 | メール | 有 | 懇親会、ゴルフコンペ、三田会合同懇親会 |
| JSPS 中国同窓会 | 中 | 1259 | 4名+支部長各1名 | 有 | 有 | メール・HP | 有 | 総会、支部会、セミナー/シンポジウムのプログラム募集 |

表2. 調査を実施した各大学・機関の同窓会組織の体制及び活動

今回調査をした組織でいえば、中国人同窓生のための組織もしくは中国人同窓生の割合が大きい組織は、比較的新しく、かつ、機関の主導で立ち上がったものが多かった。これは今回聞き取り調査を行った対象として国立大学の同窓会組織が多く、法人化後の海外拠点事務所の設立と関連しているためと考える。体制は組織によって人数等に差異はあるものの、大多数で複数の役員により会の企画・運営が行われている。また、ほとんどの組織に大学からの経費補助はなく、活動は都度の参加費により賄われていることもわかった。組織内の連絡手段はいずれもメールが主であり、中には専用HPやSNSを併用する組織もあった。また、調査対象がすべて中国内に拠点を置く大学の同窓会であったため、大学事務局が会の事務局として会員名簿を管理し、会員への連絡を行っている場合が多かった。

本調査を通して、同窓会組織運営における課題として二つの意見が挙げられた。まず一つ目は、同窓会が組織されたものの組織的な活動が少なく、また、中国人同窓生に会の存在が知られていないという課題である。二つ目は、会の活動は頻繁に開催しているものの、参加者、特に日中混合の同窓会における中国人同窓生の参加が少ないという課題である。これらの課題について、次節において分析および対策案の検討を行う。

6-2. 同窓会組織の運営に関する課題に対する分析及び対策の考察

(1) 役員体制

会の活動が少ない点について、調査前は会の活動回数は大学からの経費補助と関係があるのではないかと考えていたが、前節にまとめたように活動の頻度に経費補助の有無は大して関係していないことがわかっている。それでは、その理由として考えられることは何か。一つには、役員機能が不十分ということが考えられる。同窓会で会の活動を企画するのは役員であるから、例えば筑波大学のように役員が地区別代表1名のみとなると、当該代表者も多忙な立場にあるので、よほど個人の活動能力がない限り1人で活動を企画し行うことは難しいと考える。また、事務局である大学事務所の職員も人的資源が限られていることから、大学の業務に加えて同窓会業務を行うには負担も大きい。今後、会の活動を増やしていく上では、こうした点を考慮し、役員を複数名に増やし、役員同士が会の活動を検討する機会を持てるよう、また業務を分担し、一人一人の負担を減らすような体制に発展させていく必要があると考える。

(2) 同窓会関連情報の広報

次に同窓生に同窓会の存在を認識してもらうための方策としては、やはり広報に力を入れて取り組む必要があると考える。手段としては、まずは将来的な同窓生となる在学中の留学生への広報である。大学は留学生会と連携するなどして、海外拠点の存在・役割と合わせて、同窓会の存在を認識してもらうことが第一の方策である。もう一つは、既に卒業・修了した同窓生に対する広報である。連絡先が分かっている同窓生に対しては了解を得た上で、5章で同窓生から大学に対する希望として挙げられたように、メールで大学から情報を流すだけでも効果はあると考える。また、卒業後の連絡先が分からない場合は、大学との繋がりを保つことはより難しい。このような場合は、大学のHP等に同窓生自らアクセスしてくるのを待つほかないが、アクセスを促すツールとして、利用者数の多いSNSを活用することも一つの方策として考えられる。

なお、SNSに関していえば、海外の奨学金受給者における同窓会において、若手同窓生の会への参加率の低さが課題として挙げられており、そこでSNSが若手同窓生にも気軽に繋がれるツールとして、帰国後に継続した関係をつくるための有効な手段として用いられている²²。

(3) 中国人同窓会員の参加率の向上

次に、中国人同窓生の参加が少ないという点については、日本人同窓生と中国人同窓生とで、会に参加する際のニーズが異なることがその理由ではないかと考える。例えば、北京在住の日本人同窓生の場合、任期3～5年の駐在員が多いため、慣れない土地で新しい繋がりをつくり懇親を深め、情報交換をすることなど、気軽な交流の場をもつこと自体にニーズがあると考えられる。しかしながら、中国を熟知しており、人間関係も出来上がっている中国人同窓生の場合、交流の場としての懇親会だけでは参加する動機にはならないのではないだろうか。この点において、今回調査を行った如水会北京支部・北京如水会留学生会が合同で開催している定例の勉強会においては、

²² 文部科学省「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究—主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み—」報告書

参加者の4割程度が中国人同窓生とのことであった。このことから、懇親会を中心とした交流に加えて、一つの方策としては、具体的な専門知識の共有、自身のキャリアに繋がるような関連のある内容を加えることで、中国人同窓生の参加率が高まるのではないかと考える。

(4) バーチャルな同窓生ネットワークの運用

上記(2)に関連することでもあるが、同窓生のネットワーク化は、同窓会を組織することだけにとどまらない。既に一部の大学ではSNS等を利用したバーチャルなネットワーキングも生まれるなど、その形態は多様化している。例えば、筑波大学では2011年から「筑波大学校友会」という、クラウド上のバーチャルなネットワークがつくられている²³。「筑波大学校友会サイト」及び会員限定の「筑波大学校友会サイトSNS」があり、サイトの登録者に大学から最新情報を配信しているほか、校友会員間同士の情報交換や交流が図られている。専用SNSは既存のSNSと競合するため登録者数の伸びが決して大きくない点が課題とのことであるが、ユーザーに対し生涯メールアドレスを交付したり、メールマガジンを配信したり、学類や専攻の協力を得て利用してもらうなどして、在学中からの活用を促す仕組みをつくることで、卒業後継続して利用してもらえるようなネットワークの構築を目指している。(2)でも述べたように、若手同窓生をネットワークに取り込む策としても、バーチャルなネットワークは参加が容易という点で有効と考えられる。

6-3. 海外同窓生と大学との協働に関する課題と有効なフォローアップの考察

前節までは海外同窓生とのネットワークづくりに視点を置いて述べてきたが、大学にとって重要なことは、ネットワークづくりの先に、海外同窓生に対して期待するものがあるということである。冒頭でも述べたように、経済的な支援(寄付)や学生のキャリア支援をはじめとした学生支援、また、大学のイメージを形成する存在として、優秀な入学(留学)希望者を獲得するという点において、同窓生からの協力は大学にとって必要不可欠となる。

(1) 大学と海外同窓生との協働の形態

上述のような協力を大学から同窓会組織に対し会の活動として依頼することは、会の自律性を妨げるという意味で難しい点も多い。そのため、大学からの依頼は組織というよりも同窓生個人に対して行う必要があると考えるが、ここで大学と個人とが結びつくためにネットワークの存在は重要な意味をもつ。ただし、ほとんどの同窓生が自身の本来の仕事で多忙な中で、彼らから無償で協力を得るということは容易なことではない。しかし、そのような状況でも今回の調査で、いくつかの大学では既に同窓生個人から在学生のインターンシップや会社訪問、家庭訪問等、学生支援に対する協力を得られていることがわかった。また、あわせて大学の活動に協力を得られた同窓生に対するインセンティブとして、表彰やホームカミングデーへの招待のようなメニューの提供が行われていることもわかった。このような同窓生に対して感謝の意を形に表すような取り組みは、同窓生に大学に対するアイデンティティを高め、より大学の活動に協力したいという意識をもってもらうためにも、今後力を入れて取り組んでいく必要があると考える。大学の予算

²³ 筑波大学連携・渉外室福居専門職員への聞き取り調査に基づく。(2014年9月25日)

にもよるが、例えば4章で紹介したJSPSの外国人研究者再招へい事業のように、同窓生を再度大学に招き、現在大学で学ぶ後輩の学生（留学生を含む）に研究に関する講演やキャリアに関する講演を行ってもらうなどの取組みを独自に行うこともできればおもしろいであろう。

また、イギリスのブリティッシュ・カウンシルでは、中国における元留学生へのフォローアップとして、特にキャリア形成支援に力を入れ、ビジネスの分野で活躍している元留学生を招いた講演会やキャリア支援のセミナーを元留学生向けに開催し、非常に好評を得ているとの報告がある²⁴。高い社会的地位と高収入を求める傾向の強い中国に関していえば、キャリア支援には同窓生のニーズがあると考えられ、このようなメニューも提供できるとなるとおもしろいであろう。

(2) 同窓生との協働のために大学に期待されること

アイデンティティの高さは同窓生と大学の協働を促進するうえで極めて重要なファクターである。この関連で興味ある事例として、海外のアメリカのフルブライト奨学金の同窓生（元受給者）は、同奨学金制度に対するアイデンティティが非常に高いことが報告されている²⁵。これは、同奨学金の受給が決定した時点から受給者に対するサポート体制が構築されており、留学前相談、大型行事への招待、留学中の現地での生活・学習支援、帰国後のフォローアップに至るまで、一貫して充実したサポートメニューが提供され続けているためと考えられる。

一方、大学へのアイデンティティを測る一つの尺度として同窓会組織率がある。組織率が高ければ高いほどその大学に対する卒業生のアイデンティティは高いとされている²⁶。また、同窓会組織率に関連して、2012年に日経HRと日本経済新聞社が共同で実施した「ビジネスパーソンが卒業した大学満足度調査」を紹介したい。以下の図3の通り、同調査による自身の卒業した大学に対する「不満足の原因」の第1位は「卒業生のネットワークが弱い」こと（59.7%）であった。

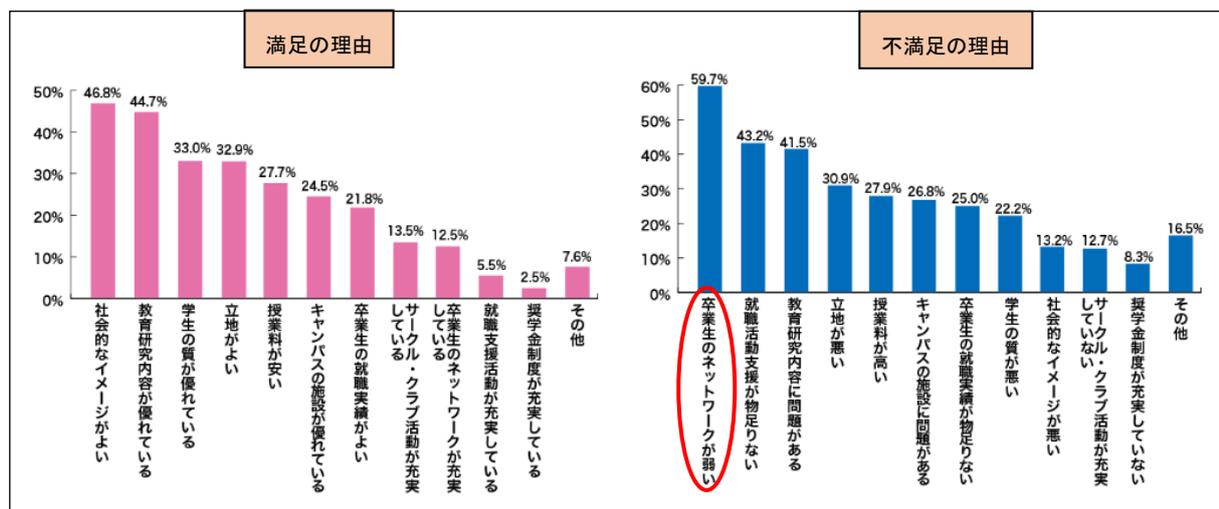


図3. ビジネスパーソンが卒業した大学満足度調査²⁷

²⁴ 文部科学省「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究—主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み—」報告書

²⁵ 文部科学省「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究—主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み—」報告書

²⁶ 本間『大学マネジメント』（2014年11月号）

²⁷ 出典：日経キャリアNET「ビジネスパーソンが卒業した大学満足度調査」（日経HR・日本経済新聞社実施）

同窓生のアイデンティティの高さと大学に対する満足度とが、同窓生のネットワークを強めるという視点から同様効果を持つ要因である（アイデンティティが高い＝満足度が高い）と考えれば、大学としては、同窓生のアイデンティティを高めるために、図 3 で挙げられたような不満足要素を取り除くことがまず必要である。図 3 では前述の卒業生のネットワークの弱さに続き、教育研究内容や就職活動支援が物足りないことが不満足の原因の上位に挙げられている。このことから、留学生に対して、①在学中に質の高い教育・研究を提供すること、②手厚い学生支援を行うこと、③卒業後も継続的に関係性を保ちつつ、(1) で述べたような魅力的なフォローアップメニューを提供すること、これらを揃えることが、多くの同窓生を大学に惹きつけ協働へと繋いでいくことになるものとする。

7. まとめ

本報告書では、中国における日本の各大学・組織の同窓会組織を調査し、組織運営・活動の現状及び課題を明らかにした。さらに、中国人留日経験者へのインタビュー結果もあわせて、組織運営の課題に対する方策及び将来的な大学と同窓生との協働に関する方策を検討した。

大学で海外に同窓会をつくる際に、ゆくゆくは組織を大きくし、会の活動が活発に行われることを期待する場合、能動的な役員体制をつくること、役員により自主的に、また、会員のニーズを汲んだ活動が企画されること、さらにそれらの活動内容を HP や SNS 等アクセスしやすい手段で大学とも協力して広報をすることにより、会の認知度が広がり、多くの同窓生を結びつけることができるであろう。また、そうして形成された同窓生とのネットワークの上に、大学がより多くの同窓生との協働を目指すためには、同窓生に謝意を伝える方法として、同窓生のニーズに沿った魅力的なインセンティブメニューを用意するなど、フォローアップの充実を図ることが必要である。そして、長期的な視点で留学生に対する留学前から在学中までの支援も充実させることで、同窓生の大学に対するアイデンティティが高まり、大学との協働に発展するものとする。

8. 謝辞

本調査を行うにあたり、インタビューを快くお引き受けくださった大学事務所の皆様、先生方にこの場を借りて心より御礼申し上げます。また、日々の業務や本報告書の作成において多大なるご指導とご助言をいただいた和田センター長はじめ JSPS 北京研究連絡センターの皆様、本研修の 1 年目からご指導いただいた JSPS 本部の皆様、素晴らしい研修機会を与えて下さった筑波大学の皆様にも深く感謝申し上げます。本研修の 2 年間で、JSPS 同窓会の活動には中国だけでなくフィリピン及び韓国の同窓会会合の運営に携わる機会を得た。また、中国滞在中に北京茗溪会と出身大学の同窓会に参加し、同窓生からの大学に対する誇りと期待を感じさせられた。今後は大学の現場でこの期待に添えられるよう、本研修での経験を活かして努力する所存である。

【参考文献】

- ・北京日本人会ホームページ
<http://www.nihonjinkai.org.cn/html/club/dousoukai/200811/14-528.html> (2015/2/6 アクセス)
- ・本間 政雄「同窓会の組織化に向けて～大学にとっての意味と意義」(大学マネジメント研究会『大学マネジメント』2014年11月号 P.2-7)
- ・酒井 雅子「一橋大学同窓会如水会について」(大学マネジメント研究会『大学マネジメント』2014年11月号 P.14-20)
- ・「世界の成長を取り込むため外国人留学生の受入れ戦略(報告書)」(文部科学省 HP よりダウンロード)
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm
- ・外務省ホームページ「帰国留学生リスト」
<http://www.studyjapan.go.jp/jp/ath/ath0201j.html> (2015/1/21 アクセス)
- ・「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究－主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み－」報告書(文部科学省 HP よりダウンロード)
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1330395.htm (2015/1/27 アクセス)
- ・筑波大学校友会ホームページ
<https://alumni.tsukuba.ac.jp/> (2015/1/20 アクセス)
- ・東京大学校友会ホームページ
<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/community/> (2015/1/26 アクセス)
- ・一橋大学如水会ホームページ
<https://www.josuikai.net/> (2015/1/27 アクセス)
- ・名古屋大学中国同窓会ホームページ
http://www.nushanghai.net/nu_membership/show.php?lang=ja&id=60 (2015/1/13 アクセス)
- ・早稲田大学校友会ホームページ
<http://www.wasedaalumni.jp/> (2015/1/26 アクセス)
- ・欧米同学会ホームページ
<http://www.wrsa.net/index.htm> (2015/2/2 アクセス)
- ・「帰国留学生要覧」(平成25年度8月時点)
- ・『留日学人通信』2014.12 総第三十三期 留日学人活動ステーション発行
- ・スーパーグローバル大学等事業スーパーグローバル大学創成支援(日本学術振興会 HP よりダウンロード)
http://www.jsps.go.jp/j-sgu/h26_kekka_saitaku.html (2015/1/6 アクセス)
- ・筑波大学構想書
- ・東京大学構想書
- ・名古屋大学構想書
- ・早稲田大学構想書
- ・日経キャリア NET ホームページ「ビジネスパーソンが卒業した大学満足度調査」(日経 HR・日本経済新聞社共同実施, 2012)
<http://career.nikkei.co.jp/contents/ranking/20121105/> (2015/2/11 アクセス)